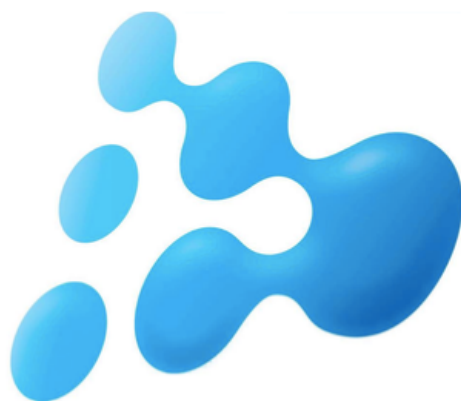


国際開発プランニングコンテスト2016

# 活動報告書



**IDPC**

Incubation of Development Project Creators  
In Indonesia

**2016**

## はじめに

2015年9月25日第70回国連総会において、持続可能な開発のための2030アジェンダが採択されました。このアジェンダでは「we pledge that no one will be left behind.」と記されているように、貧困の完全撲滅を2030年度までに達成することを目標としています。しかし、格差は一層進んでおり、今後人類はさらなる気候変動や食糧不足・難民問題等に直面していくこととなるでしょう。その一方、国際協力体制にはその仕組み上、多くの課題が残されていると言えます。このような世界情勢から、目標達成のためには国際開発分野におけるさらなる優れた人材の輩出が急務だと言えます。2030アジェンダが採択された今、ただ国連で決定された目標をただ素直に受け入れるだけでなく、これからの開発分野を担う私たち自身が、世界に残される開発問題について考えることが重要なのです。

2016年度のIDPCは国際協力を志す若者を最大限エンパワーすることができるプログラム作りを目標に、実現に向けて精進して参りました。まず特徴としては、昨年度同様「海外事業プログラム」を導入し、国際開発を志す若者が実際に途上国に赴き、社会課題を自分の目で見、現地調査に基づき現地の同世代の学生との共同作業により課題解決について考える場の提供を行いました。さらに今年度はプランニングによりアウトプットを図ることに加えて、渡航前に事前勉強会を開催して講義・議論を中心に「インプット」の場を多く設けました。インプット・アウトプットの双方のバランスとコンテンツの質を向上させることを目的としたものです。この点は参加者の方々から大変ご好評を頂くことができました。

結果として、IDPC2016には国際協力分野に強い情熱を持つ日本とインドネシアの学生30名に参加して頂きました。両国の学生が国を超えて社会課題に取り組む様子は、まさに「国際協力」の模擬体験とも形容でき、互いに刺激を受けながら議論する様子が印象的でした。このプログラムでの経験を機に、参加者の方々が将来国際協力分野において活躍する日が来ることを開催者として強く信じています。

IDPC2016の実現にあたり、国を超えて実に多くの方々にご協力頂きました。国際協力分野に熱い志を持つ学生を応援してくれる社会人の方の多さに驚くとともに、IDPCのプログラムの社会的意義を実感することができました。これからもIDPCは「国際協力を志す若者のプラットフォーム」として、役割を果たしていきます。これからも多くの方々に応援して頂けるような組織となれるよう活動を続けていく所存ですので、引き続き御協力のほどよろしく御願い致します。

国際プランニングコンテスト実行委員会 代表

慶應義塾大学 経済学部

水本雄介



# 目次 contents

## I. 概要

---

1. 全体スケジュール	4
ーキックオフセッション/インドネシア・フィールドワーク/コンテスト当日	
2. 企画の趣旨ーコンテスト全体を通して/ケースの意図/審査基準/プランニング	5
3. 参加者の傾向ー参加者の専門分野、在籍大学、学年	7

## II. 当日

---

1. 実施概要ー日程、場所ー参加人数など	8
2. 国内セッション	9
ー事前勉強会/事前合宿/基調講演(講義概要、講師紹介)/フィールドワーク前コンサルティング/参加者の声	
3. 海外セッション	14
4. 最終発表	18
ープランニング案(プラン概要/チーム名/メンバー)/チームメンバー /最終発表(審査員紹介)	
5. アンケート分析ー各コンテンツ/プランニング/フィールドワーク/全体	21

## III. 運営

---

1. 主催団体ー組織概要/一年の活動/スタッフ	22
2. 活動詳細ー理念・目的の共有/定期ミーティング/協賛活動/広報活動	23
3. 決算報告	25
4. 協賛・協力ー協賛/物品協賛/協力/後援/Special Thanks	26

# 1. 全体スケジュール

## ●キックオフセッション

日程：2016年8月13日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

参加人数：13名



## ●事前勉強会（合宿）

日程：2016年9月9日～10日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

参加人数：15名



## ●海外フィールドワーク

日程：2016年9月11日～18日

場所：インドネシア、レンテンアグン（調査拠点）

参加人数：29名(内15名 インドネシア大学参加者)



## ●最終報告会

日程：2016年10月2日

場所：JICA地球ひろば（JICA市ヶ谷ビル内）

参加人数：15名





## 2. 企画の趣旨

### ●コンテスト全体を通して

対象者：国際開発に関心があり、将来当該分野で活躍する可能性のあるすべての人を対象者とした。今後の国際開発を担うであろう人に参加していただくため、自らの専門分野を国際開発に活かしたい大学生・大学院生だけでなく、自らの経験を活かして国際開発分野に携わりたい社会人の方々も対象に含めた。

提供する場：将来国際開発の分野で活躍する上で大きなステップアップとなるよう、コンテストを通して、3つの「場」を提供した。



### ●ケースの意図

東南アジアの大国であり、経済的にも、その特異な国の成り立ちからも注目を浴びるインドネシアが今回の海外フィールドワーク地である。首都ジャカルタ郊外にある通称カンボンと呼ばれる地域の一つでフィールドワークを行う。本プログラムでは、参加型開発的な考えを重要視し、地域に対する理解を前提としたプランニングを前提とした。また、現地インドネシア学生との共同作業によるフィールドワーク及びプランニングを行い、国際開発分野に必要なとされる国境を越えた共同作業を重視した。

### ●審査基準

現地プログラム内報告会、最終報告会における審査基準は、「解決すべき課題を的確に把握できているか」「解決策を明瞭に提示できているか」「見込まれる社会インパクト」「解決策の実現可能性」の大きく4つを設定し、特に解決策の実現可能性を重視して、審査を行った。上記の4つの基準をさらに細分化したものにそれぞれおよそ10点ずつを配分し、全体を100点満点とするシートを4人の審査員に採点して頂き、計400点満点とする形を採用した。今後のプランニング内容の強化のため、審査結果は審査員の方々からのフィードバックを含めて各チームへ返却した。発表時間には時間制限を設け、時間超過に関しては、1分につき5点減点した。

#### (1) 国際開発に必要な知識・スキルを身につける場

国際開発の分野でプロフェッショナルとして活躍するためには、語学力や専門知識はもちろんのこと、論理的思考力やコミュニケーション能力などの総合的能力も必要とされる。自身の能力を改めて確認し、磨きをかけることを、コンテストの大きな目的の一つとした。

#### (2) 同じ志を持つ仲間との出会いの場

コンテストでは、普段の生活では出会えないような熱い志を持った若者たちが全国から一同に集結する。国内プログラムにとどまらず、1週間という期間を海外のフィールドワーク地でもともに過ごすことによって、お互いに良い刺激を与え、これからのキャリアについて考える際や将来実際に仕事をする際に信頼し合える繋がりをつくる場を提供した。

#### (3) 国際開発分野のプロフェッショナルとの交流の場

学生や他分野を職業にしている者にとって、国際開発の第一線で活躍する方々と出会える機会が多いとは言えない。現職者の方々に直接話を伺ったり自分の疑問をぶついたりすることで、国際開発分野への新たな発見やより深い理解を獲得し、当該分野を将来の現実的な選択肢として捉えることが出来ると考えた。

## プランニング

今年度のプランニングのフィールド対象地域は、インドネシア ジャカルタの都心部から車で1時間ほど離れている南ジャカルタのカンボン地域である。カンボンとは「ある地域における小住宅の密集地域」を指す。高層ビルが林立するジャカルタ都心部とは異なり、「途上国」としての様相が残存している地域で、部外者の日本人による開発援助(コミュニティ開発)の可能性を問う機会となった。日本人から見たら貧困である住民たちは、実に幸せそうに暮らしているケースがインドネシアにおいては多い。開発援助のアクターとして、人に「必要とされて」プランニングしたいという「部外者」としての考えと、実際には明確には「必要とされていない」現実とのジレンマを抱えながらのプランニングとなったため、例年に比べるとテーマ設定が難しい年度と形容できるかもしれない。

2016年度は事前課題図書として、インドネシア研究の第一人者倉沢愛子様による著書「ジャカルタ路地裏フィールドノート」を設定した。その本に書かれたフィールド調査対象地域に関する情報を基に、事前勉強会では参加者には現地の課題分析と仮説の課題解決案をプランニングしてもらった。これは、現地調査と現地でのプランニングを効率的に行うことを目的としたものであり、事前勉強会ではコンサルタントの方にお越しいただき、渡航前にプランに対するフィードバックを頂戴した。その上で現地のフィールド調査、現地発表におけるフィードバックを通して、プランの洗練化を図った。帰国後には複数の専門家からプランに対して文章にてアドバイスを頂いた。

途上国に行くのは初めてという参加者も少なくなかった。フィールド調査を通して現地の感覚や価値観を学んだという声が非常に多く、学びに富んだ機会となったのではないかと感じている。

## 現地での発表

インドネシアでは9月17日に現地でプランの発表を行った。日本人参加者とインドネシア大学(UI)の参加者が共創して作り上げたプランに対して、現地の専門家からフィードバックを頂く機会となった。この発表タイムの目的は、大きく二つに分けられる。① UIの学生と作り上げたプランを共同で専門家に提案する場 ② プランに対してフィードバックをいただき、日本国内における最終報告会に備えることである。現地ではその段階での優秀案の発表を行い、優勝チームを1チーム決定した。現地の審査員にはおしなべて高評価をいただき、「日本とインドネシアの若者が課題解決のために協働している様子に感銘を受けた」とのコメントを頂いた。

### ●審査員

- ・倉沢愛子様 慶應大学名誉教授
- ・平山修一様 JICAインドネシア事務所 企画調査員
- ・ Mr.Bambang Laksmono(Professor)  
University of Indonesia, Department of Social Welfare
- ・ Mr.Eko Komara Penabulu Foundation



# 3.参加者の傾向

このセクションでは、専攻分野、大学、学年、などといった基本データを基に、idpc2016参加者の特徴や傾向を述べる。

## 専門分野

ほとんどが文系の学問を専攻。参加者の多くは過去に国際協力関係のプログラム参加などの経験があり、大学で模擬国連や国際関係サークルに所属している者も数人いる。

## 学年

日本人参加者: 全15名の参加者は大学1から4年・修士課程（2年）で構成され、幅広い年齢層・バックグラウンドを持つ学生が参加した。

## インドネシア参加者

インドネシア大学の学生であり、3，4年生が中心であった。専攻は社会福祉、国際関係論のほか、工学といった理系の学問を学んでいる学生も参加した。

	大学名	人数
国内(15名)	青山学院大学	1
	お茶の水女子大大学院	1
	学習院大学	2
	関西学院大学	1
	慶應義塾大学	2
	創価大学	1
	津田塾大学	2
	東京外国語大学	1
	東北学院大学	1
	日本女子大学	1
	明治大学	1
	早稲田大学	1
	海外(15名)	University of Indonesia

# 1. 実施概要

## ●キックオフセッション

事前課題発表のあとにJETROアジア経済研究所の佐藤寛さま、前在インドネシア大使館公使の貴島さまにご講演していただいたのち、企業・NGOなど様々なフィールドの方々にお越しいただき参加者のキャリア相談に乗っていただいた。



## ●事前合宿

約1週間のインドネシアでの現地フィールドワーク調査を前に、2日間に渡り合宿形式の事前勉強会を行った。様々な業界で活躍されているの方々からのご講演を通じて、国際社会でのキャリアを切り開くための姿勢やソーシャル・ビジネスなどの事例を学習するとともに、2日目午後のコンサルタントの方との面談に備えて各班のプランの掘り下げや見直しを行った。



## ●フィールドワーク @インドネシア

インドネシアの首都ジャカルタの南部に位置するカンボン地区へ赴き、インドネシア大学の学生と現場リサーチ、国際開発プランニングコンテストを行った。現場リサーチの際には、インドネシア研究の第一人者である、慶應義塾大学名誉教授倉沢愛子様  
の監修の下、住民へのインタビュー・施設訪問等を通じた本格的なりサーチを行った。また、現地のJICA事務所を訪問するスタ  
ディーツアーや現地NGOのCEOによる講演も行われた。



## ●最終報告会

事前合宿・インドネシアでのフィールドワークを経てそれぞれのチームが考えた革新的かつ持続可能な最終ビジネスプランを発表するとともに、国際開発・途上国ビジネスの第一線で活躍されている方々に審査・各チームへのフィードバックをしていただいた。





## 2. 国内セッション

### 《キックオフセッション》

参加者が正式に決定し、参加者の顔合わせと現地フィールドワークに向けての心構えを学ぶために開催された。参加者はお互い会うのが初めてだったこともあり緊張した人が多かったようだ、しかし、チームを組み、事前に出された課題についてしっかり準備し発表される姿からは柔軟な対応が見られ、実りの多い会となった。事前課題発表のあとは国際開発学会会長でおられるJETROアジア経済研究所の佐藤寛さま、前在インドネシア大使館公使で外交官でおられる貴島さまによるご講演があった。佐藤様からはSDGs開発目標を踏まえた開発援助とビジネスのあり方・フィールド調査の際に意識すべきことについて、貴島様からは安全保障の観点から見たODAのあり方・外交政策における日本の立ち位置についてご講演いただいた。どちらの講演も参加者の皆さんの心にも強く残ったことが、参加者へのアンケートにて伺える。

### ～キャリア相談～

日本国内国外におけるNGOや社会貢献事業に関わっていらっしゃる社会人の方に、参加者自身のキャリア構築の相談を行った。各チーム15分ずつローテーションで行い、キックオフセッションにもお越しいただいた講演者の方からキャリアに関するアドバイスをいただくことができた。



## ～基調講演～

### [SDGs開発目標を踏まえた開発援助とビジネスのあり方]

#### 佐藤寛氏 (JETRO)

SDGsとビジネスのあり方、フィールド調査の際に心がけるべき点についてお話しいただいた。2015年に国連によって制定されたSDGs開発目標を意識しながら、様々なアクターによる国際協力のあり方について具体的なケースを取り上げてご説明頂いた。また、社会学者としてフィールド調査の専門家である佐藤様から直々にフィールド調査における心構えについてご講義頂いた。渡航前にしっかりとフィールド調査について学ぶことができたのは意義が大きかったであろう。

#### --講演者紹介--



佐藤寛: 東京大学文学部社会学科卒。JETRO 新領域研究センター上席主任調査研究員。また、2011年より国際開発学会会長を務める。イエメン・エリトリアでの地域研究が専門。著書多数。

#### 参加者の声

フィールド調査の際に必要な知識について学んだ。服装から、現地住民との接し方等まで普段意識しないことを渡航前にしっかりと学ぶことができてとても良かった。

### [安全保障の観点から見たODAのあり方・外交政策における日本の立ち位置]

#### 貴島善子氏 (国際交流基金)

安全保障の観点から見たODAのあり方、外交政策における日本の立ち位置についてお話頂いた。国レベルで「国際協力」を考えた時に重要なテーマとなるのが、ODAである。そして日本からのODAは途上国の発展に大きく寄与してきたと言える。一方で、ODAとは途上国が「かわいそうだから」援助することを目的としたものでは決してない。これまでに外交の現場で国際協力の「現実」を目の当たりにしてきた外交官の方だからこそ語ることができる「国益」としてのODAの側面とその背景にある日本の安全保障について、国際情勢をドラえもんの世界に例えながらユーモアに富む分かりやすいご講演をして頂いた。

#### --講演者紹介--



貴島善子: 京都大学法学部卒、ハーバード大学アジア研究学修士課程修了。外務省入省後、国際協力局人道支援室長、国際協力局国別開発協力第三課長、在インドネシア大使館公使を歴任。現国際交流基金総務部長。

#### 参加者の声

国際情勢をドラえもんの世界例えたお話はとても分かりやすく、外交の現場のリアリティを実感した。視野が大きく広がった。

## 《事前勉強会》

本年初めて取り入れたイベントであり、本年度の特徴の一つとも言える。最大の目的は、社会の最前線で活躍される専門家から直接講義・アドバイスを受けることで、渡航後のフィールド調査・プランニングの効用を最大化することにある。副次的な目的としては、国連・途上国ビジネス・NPOなど、参加者が将来的なキャリアモデルとして興味を持つ方々からお話を聞くことで、キャリア形成に有効な情報を得ることがあった。

プロフェッショナルによる講演やコンサルテーションからは学びが大きかったことは言うまでもなく、国際協力分野で活躍されてきた方々の話から「新たな視点」を得られたという参加者の声が多かった。一方、事前勉強会は合宿形式を採用したため、参加者同士が交流を深める良い機会になったと言える。総合的に見て、事前勉強会がプログラムを通して果たした役割は大きかった。

### ～コンサルティングタイム～

コンサルティング業界で一般的な考え方として普及している「仮説思考」を使って、事前にインターネットや書籍上で得られる情報を元に、調査対象であるフィールド現場における開発課題の分析とその解決案の提示を行った。これらを通して、現地でのプランニングを効率的に行うことを目的とした。

コンサルタント **榮氏 (PwC Japanグループサステナビリティサービス担当)**

#### 参加者の声

事前にプロの方からコンサルティングを受けることで、渡航前に自分たちのプランニングに足りない視点や考え方を学ぶことができた。渡航前に自分たちのアイデアを客観的に分析することができたのはとても良かった。





## ～テーマ講演～

### 『国連と国際協力』

赤坂清隆氏 (フォーリンプレス・センター理事長)

国連のトップでご活躍されたきた、その豊富な経験から「国連と国際開発」と「国際協力分野で日本人が活躍するには」についてお話頂きました。ぶれない矜持に根ざした振る舞いをする姿勢が、国際機関で勤務する者に留まらず、国際開発に携わる者全てに共有されてほしいとの熱い思いが伝わって参りました。

#### --講演者紹介--



赤坂清隆: 京都大学法学部、英国ケンブリッジ大学経済学部 卒。GATT事務局、WHO事務局に勤務。外務省国際協力部参事官、国連日本政府代表部大使を経て経済協力開発機構事務次長に就任。2012年までは国連広報担当事務次長(広報局長)として、国連の広報強化に努めた。

#### 参加者の声

Big pictureからひとつの国を見つめる”という考え方はとても有効だと思うので、学べてよかったです。外交官や国際機関で働いていらしゃった経験から、環境問題から自信をつける方法までお話を聞くことができたのは本当に勉強になりました。

### 『途上国ビジネスと国際協力』

山崎大祐氏 (マザーハウス取締役副社長)

山崎大祐様には、途上国で生産したバッグ等を日本などで販売するソーシャル・ビジネス事業自体についてだけでなく、大学時代のご自身の問題意識などについてもお話いただきました。自らの現在の生活を振り返りつつ聞いている参加者の姿が目立ちました。

#### --講演者紹介--



山崎大祐: 慶應義塾大学総合政策学部卒。大学を卒業後、ゴールドマン・サックス証券入社。エコノミストとして、日本およびアジア経済の分析・調査・研究や各投資家への金融商品の提案を行う。株式会社マザーハウスの経営への参画を決意し、同年7月に同社取締役副社長に就任。

#### 参加者の声

民間企業は消費者という大きなアクターを巻き込むことができるので、民間企業から消費者、生産者をつなぐことができる、発展途上国への支援・協力の可能性をすごく感じました。

慎泰俊氏

(株式会社五常・アンド・カンパニー代表取締役)

まず初めに、ご自身のバックグラウンドと現在の仕事の結びつきについてお話がありました。そして、「機会の平等」を通じた貧困削減を目指す同社のマイクロファイナンス事業等のご説明とともに、現地の方と接する際の基本姿勢について実践的なご指導をいただきました。

--講演者紹介--



慎泰俊: 2006年よりモルガン・スタンレー・キャピタル, 2010年からはユニゾン・キャピタルに勤務。2014年7月に五常・アンド・カンパニーを共同創業し、現在カンボジア、ミャンマー、スリランカで2万人に金融サービスを提供している。

#### 参加者の声

・金融と聞いてどうしても取っ掛かりづらいイメージを抱いてしまいがちだが、すごく開発で有効な手段だと思いました。現地の人と同じように生活することはすごく難しいけれど、演じるように自分もインドネシアで実践したいと思いました。

### 『NPOと国際協力』

天花寺宏美氏

エンジニア アブドゥール様・デイマス様

(コペルニク・ジャパン代表理事)

インドネシアからスカイプを通じてご講演いただきました。同社は、革新的なテクノロジーと、それを必要とする途上国地域を結びつける事業を行っています。いずれのご講演においても、参加者から意欲的な質問が数多く寄せられ、皆さんの国際開発の分野にかける強い意気込みが感じられました。

--講演者紹介--



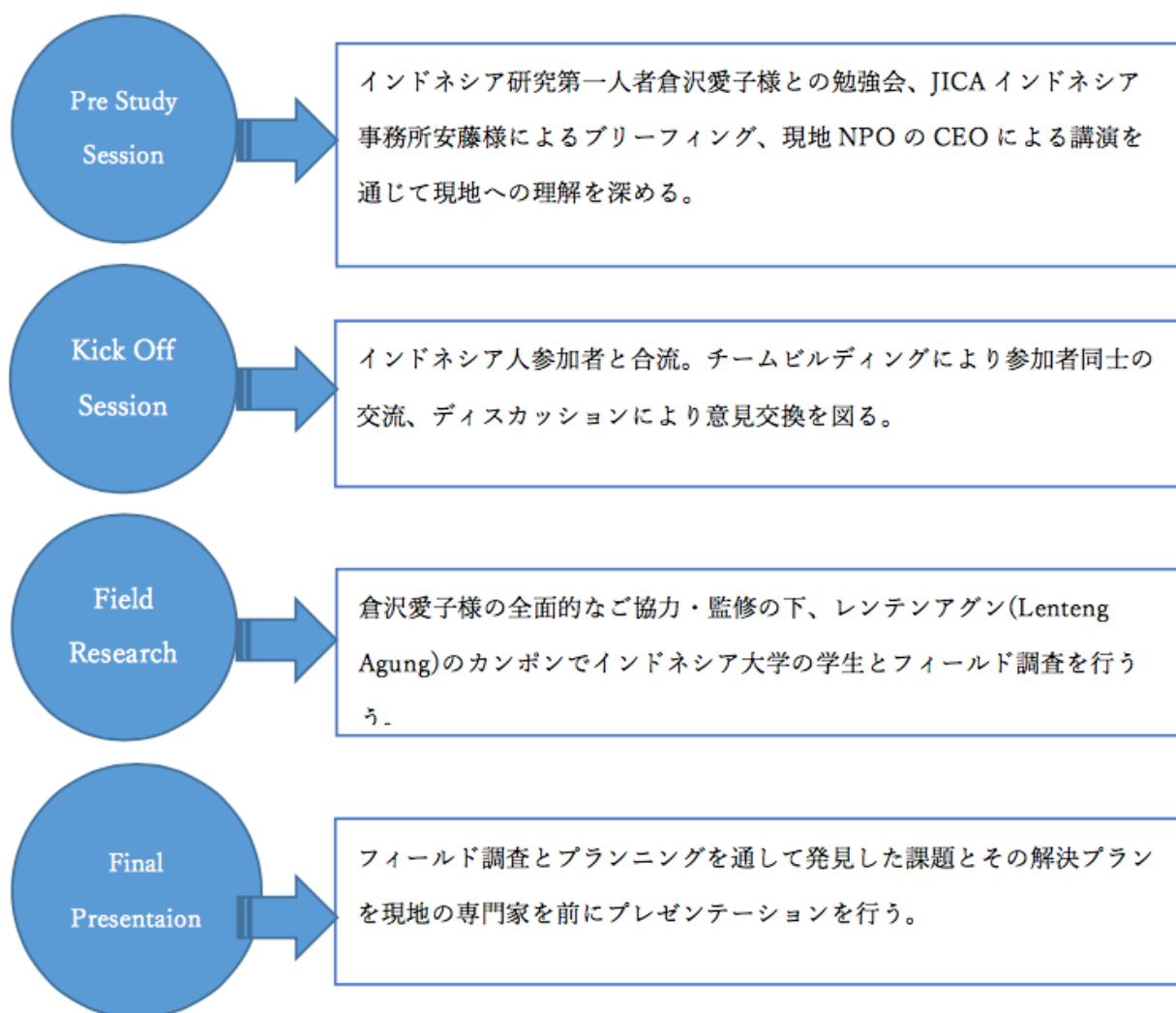
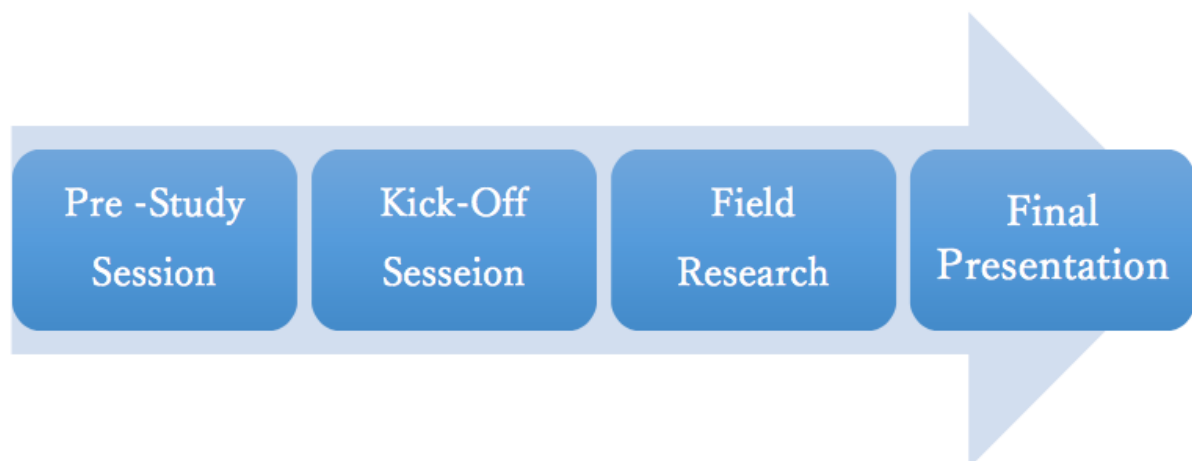
天花寺宏美: 途上国の人々の「生活の向上」と「自立」を目指し、革新的なテクノロジーを現地の人々へ届けている一般社団法人コペルニク・ジャパン代表理事として日本でのコペルニクの活動全体を統括し、企業のCSR活動に関するパートナーシップ構築や協業プロジェクト実施とともに、途上国向け製品の開発、市場調査、ビジネスプラン作成を行うアドバイザー・サービスの顧客対応を行っている。

#### 参加者の声

世の中にはどんな分野にも様々なアプローチをしているのだと驚きました。ニーズとソリューションをソーシャルビジネスをするためにどう考えるべきか改めて整理ができました。コペルニクさんに以前から興味を抱いていたので、実際のお声を聞いて光栄でした。

# 3. 海外セッション

## ●フィールドワーク全体像



## 《インドネシア・フィールドワーク》Day1~6

### 【Day1】

深夜にスカルノハッタ空港に到着したのち、現地プログラムでお世話になる倉沢先生と顔合わせをし、調査拠点となるレンテンアグンへ移動した。

午前中は希望者を対象にイスラム教の祭礼である「犠牲祭」を見学。午後は倉沢先生によるオリエンテーションの後、翌日から始まるフィールドワークの対象地域となるカンポンを見学した。



### 【Day2】

午前中はSenayanにあるJICAオフィスを訪れた。

午後はインドネシア大学(UI)に向かい、キックオフセッションを行った。キックオフセッションではUIの学生と顔合わせをし、自己紹介、ミニゲームを通して交流を深めた。その後はグループに分かれて、日本人参加者が国内で準備した暫定のプランニングをUIの学生に共有した。専門的な内容であるため理解してもらうのに苦労する姿も多々見受けられた。



### 【Day3】

海外フィールドワーク3日目には、終日かけ、実際にフィールド調査を実施した。各チーム、地域内の家を訪れ、住民の方々にお話を聞いたり、町の中に根づく日常生活を観察し、プランニングに必要な情報を集めた。

### 【Day4】

午前中は前日のフィールド調査から得られたことをベースに、各班の取り組む課題の現状を掘り下げるべく、再度フィールド調査を行った。午後はインドネシア現地の課題解決に取り組む方からお話を伺う機会として、YCAB Foundation CEOのVeronica様に、社会的企業とは何か、またその重要性についてYCABの事例を踏まえながらご講演いただいた。講演の後は、引き続きインドネシア大学にてプランニングを行った。



### 【Day5】

3日目同様、一日をフィールドワークに使い、翌日の報告会での発表に必要な調査、準備を行った。また、夜には、次の日に控えるプレゼンテーションに備えて、夜を徹してプランニングを進める参加者もみうけられた。

### 【Day6】

海部外フィールドワーク最終日である6日には、インドネシア大学にて現地報告会が行われた。結果発表の後はFarewell Partyを行い、日伊の学生が楽しく交流した。





## 1. Pre study-session

### ◇JICA訪問

SenayanにあるJICAインドネシアオフィスを訪問した。始めに立松次長より、インドネシアにおけるJICAの事業の概要から、国際開発の実情、さらには国際協力で求められる人材像など多岐にわたってお話をいただいた。次にIDPCが長年お世話になっている平山企画調査員より、ASEANの構造・ASEAN地域における開発の実情についてマクロな視点からお話をいただいた。質疑応答の時間では、安藤所長にもご参加いただいた。そこでは積極的な質問が続々となされ、講演内容が参加者の求めていたものにマッチした、魅力的なものであったことを窺わせた。



### ◇現地NPOの方によるご講演

インドネシア現地の課題解決に取り組む方からお話を伺う機会として、YCAB Foundation CEOのVeronica様に、社会的企業とは何か、またその重要性についてYCABの事例を踏まえながらご講演いただいた。社会起業精神の重要性について熱く語りかけるVeronica様の講演に聞き入る参加者の様子が印象的であり、講演後には、日伊問わず多くの学生から質問が飛び交い、盛況のうちにセッションは終了した。



## 2. Kick-off Session

インドネシア大学(UI)に向かい、キックオフセッションを行った。キックオフセッションではUIの学生と顔合わせをし、自己紹介、ミニゲームを通して交流を深めた。その後はグループに分かれて、日本人参加者が国内で準備した暫定のプランニングをUIの学生に共有した。



## 3. Field Research ・ Planning

各チーム、地域内の家を訪れ、住民の方々にお話を聞いたり、町の中に根付く日常生活を観察し、プランニングに必要な情報を集めた。

最初のフィールド調査では自分たちが想定していない答えが返ってくることや思っていたことを聞くことが出来なかったなど多くの課題に直面し、その解決のためチームでフィールド調査自体の改善についても話し合いを重ねていた。

フィールド調査はインドネシア大学の学生と行い、特に住民とのやりとりはインドネシア学生が担当していたので、チーム内での現状や得たい情報の共有が重要になり、そういった点からも住民へのインタビューを行ってはチーム内でしっかりと話し合い、またさらにフィールド調査を行っていくという作業が繰り返された。

フィールド調査やインドネシア学生との話を通して、より実現可能性のあるプランへと、当初から大きくプランを変えていくチームもあった。チームの中には、プランニングの中で必要な情報を得るため、地域内でのゴミ収集の活動について回ったり、特定の施設を訪問したりなど様々な形でフィールド調査を進めていた。複雑な構造的要因に起因する現地の社会課題を分析する上で、どの点に焦点を当てて現地の住民の方々にインタビューを行うか、に難しさを感じるグループは多かった。



## 4. Final Presentation

海外フィールドワーク最終日である6日には、インドネシア大学にて現地報告会が行われた。現地報告会は、各グループがこれまでのフィールドワークに基づき、現地の社会課題に対して解決案を提示する場であり、各班はこの日のためにプランニングを寝る間を惜しんで作り上げてきた。

審査員としては倉沢愛子様、JICA企画調査員の方やインドネシア大学の教授と現地NGOの代表理事にお越しいただき、各グループが考案したプランに対してフィードバックを頂戴した。

ゴミ問題、蚊による感染症、地域安全、教育など様々な分野における社会課題に対して、各班とも、工夫をこらしたプレゼンテーションが行われた。





# 4. 最終発表

## ●審査員



打田郁恵 株式会社オリナス・パートナーズ代表取締役



脇坂知典 アイ・シー・ネット株式会社 ビジネスインキュベーショングループ



筒井哲朗 一般社団法人シェア・ザ・プラネット代表理事



倉沢愛子 慶應義塾大学名誉教授

## ～フィードバック～

発表後、来場していただいた審査員が各チームへプランの内容だけでなくプレゼン力に関しても細かくアドバイスを頂いた。最後には倉沢様から数日間に渡ったフィールドワーク全体を通して「とても熱心に取り組んでいた」という声をいただくことができた。





## 《プランニング案》

### A班 「レモングラスプロジェクト」

現地で簡単に入手可能であるレモングラスという蚊除け効果のある草本を積極的に活用して、地域全体で、デング熱対策に関する社会的なレベルの意識改革を進める。政策としては、教育機関による子供向けワークショップの開催を通して継続的な教育を行う。また、その際にクーポンを用いて保健所や地元の個人商店、住民にも経済的インセンティブが発生するようにし、持続性を担保する。

#### MEMBER

亀山健

田中るり子

池田泰樹

Dini Bonafitria,  
Meutia Rahmadina,  
Rizka Amalia Putri



### B班 「持続可能なゴミ管理システム」

地域内における、ゴミ・環境問題への意識の希薄さや貧困などを背景として生じる、既存のゴミ管理システムを改善する。具体的には、ミミズを活用して生ゴミを堆肥に変えるなど、ゴミ資源を有効活用する。また、リサイクル可能ゴミを指定してそれらを買取る制度を導入するなど、分別・収集方法を効率化する。政府の資金提供やNGOの技術支援も取り入れ、1人に依存する住民非参加型システムから、住民参加型の持続可能なシステムへの転換を試みる。

#### MEMBER

小島直大

張文曄

大久保遼祐

Gita Permata Aryati,  
Adfikri Kevin Marvel,  
Nopitri wahyuni



### D班 「MANABU」

既存の学校で行われる教育では、子供たちは十分に学習内容を理解していないという課題がある。また、多くの場合、地域内の家庭では金銭的な事情から子供たちを比較的费用がかかる学習塾のようなものに通わせることはできない。そうした課題を解決するため、マイクロファイナンスによって家庭の教育費用の工面を支援すると同時に、低価格補講塾を提供することで子供達の教育環境の改善を目指した。

#### MEMBER

佐々木奈摘

田中秀佑悟

石綿亜友美

Monica Dwiyanti,  
Fredhie Edwardo



### E班

#### 「PKK女性の「やりたい！」を叶えるプラットフォーム」

現在地域内でゴミ・衛生問題に取り組むなどの組織的活動も行っているPKKという女性による自助組織の活動を支援する。収入向上などを目的とした組織内事業立ち上げの意欲はあるものの資金や知識不足から実行に移せない、もしくは失敗してしまうという課題に対して、国際機関やNGOなどと地域住民を結びつけるプラットフォームをアプリなどのツールを介して提供する。地域住民、支援団体側、両者にとって新しい形となる途上国開発分野におけるマッチングサービスの支援方法を展開することを目指す。

#### MEMBER

生駒比菜子

山田菜々香

柏瀬萌佑

M. Ivan Putra M,  
Noviyanti Gultom,  
Supriadi



## ●最優秀賞

### C班 「カランタルナ活性化プロジェクト」

近年活動が停滞しつつある、カランタルナという地域の青年組織を、次の3つの段階を踏んで活性化する。①地域主体の確立: メンバーの自覚を促し住民との対話・交流を重視すること、を通じた組織の社会化 ②K.Bonding: 公文の教材販売を請け負って得た収益を基盤にした経済的自立と、教育を通じた地域の結束 ③NGOによる運営支援によるマネジメント力と政策実行力の向上。以上により地域の社会的つながりを強め、地域特有の社会問題を自力で解決できるような組織を目指す。

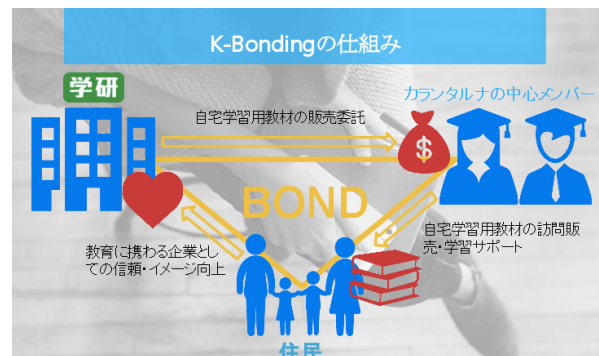
#### MEMBER

佐々木勇太

引本彩華

久保井颯太

Defi Satriyani,  
M Sholachul Fazry,  
Regina Dhamayanti



#### ●評価ポイント

「地域の結束の欠如」という抽象的とも言える課題に対し、4W1Hを明確にしなが、細部まで詰めた論理展開で順序立てて、具体的な解決案を提示した点が評価された。



#### ~総括~

優勝チームは近年活動が停滞しつつある、カランタルナという地域の青年組織の活性化によりコミュニティ内の若者の結束を促し、地域の安全・安心を構築する案を考案した班であった。

いずれの班のプランも、日本とインドネシアのユースが智を集めて立案されたものであり、審査員の方からは好評をいただいた。国を超えてユースが社会課題に真剣に取り組む様子に感銘を受ける審査員の方の様子が印象的であった。

#### 参加者の声

初めてのビジコン、しかも現地のフィールドワークを踏まえた上でのより具体的かつ実現可能なプランに挑戦する機会を与えてくれて本当に感謝している。なかなか問題が見つからなくて、どうしよう・・・と行き詰まったり時間がなくて追い込まれたりしたこともあったけど、今ではとてもいい経験になった。ビジネスプランを考える時はこんなにも考えなければいけないことが多いんだと知って驚いた。収益をどう出すか、事業をどう拡大するか、なにが私たちのビジネスのお客様にとって得なのか、などなど本当にプランを実現するためには超えなければいけない壁がたくさんあって、今回は全ての壁をクリアすることはできなかったけど、とても有効なフィードバックもいただけ、素晴らしい経験になったと満足している。また、出会えたメンバーがとても素敵だった。グループのメンバーは、「力がない」と言いながらも一生懸命考えておたがい意見を深め合うことができたし、最後まで頑張れたのもチームメイトのおかげだった。インドネシア学生はすごく頭の回転が早くてしかもやさしい人ばかりで、本当に出会えてよかったと思った。

# 5. アンケート分析

## 各コンテンツ

全体のプログラムの中で、参加者の満足度が最も高かったのは「海外フィールドプログラム」であった。現地の「JICAオフィス訪問」や「インドネシア大学の学生とのプランニング」、そして何よりも倉沢慶應名誉教授の監修のもとでの「フィールドワーク」などコンテンツが豊富であったこと、インタビューを通して途上国現地の実情を知ることができたことが大きい理由となった。事前勉強会では、参加者グループが熱心に現地のことを勉強する様子が見られたが、現地に行くとはより新たな発見が多かったようである。机上だけでなく、現地で身をもって社会課題を感じる機会の重要性を悟った参加者がほとんどであったに違いない。

## プランニング

途上国とはいえ、多くの問題を抱えながらも幸せそうに暮らす現地の人々を前に、解決する課題を設定することが難しいと感じるグループが多かったようだ。しかし、その難しさを知ること自体が参加者にとっては良い経験になったようだ。さらには自分たちがその苦難の末に導いた課題解決案を社会の第一線で活躍するコンサルの方に複数回にわたり評価して頂いたことは、参加者に新たな気付きをもたらすことが多かったようで、「貴重な経験ができた」という声を多くもらった。

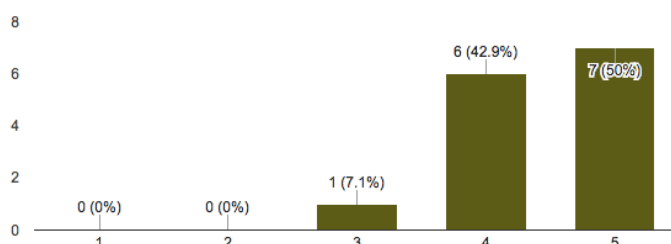
## フィールドワーク

実際に現地でフィールドワークを行うことで、「現場感覚」を身につけることができたという声が多かった。日本という国で描く「途上国像」と現地のギャップの大きさを痛感した参加者も多かったと感じた。また、現地の優秀な学生とのプランニング作業で「ディスカッション能力」が得られたとの声も上がり、国際協力において必要といえる様々なスキルを体得する契機となったようだ。一方で現地の運営の情報伝達の遅さにストレスを感じる参加者も多かったようで、次年度に向けて改善すべき注意点であるといえる。

## 統括

全体のプログラムへの満足度は93%という結果になった。その中でも「非常に満足」が50%、「満足」が43%となった。全体としては概ね参加者の満足が得られたようだ。プログラムの満足度が高かったことだけでなく、例年よりも参加者のまとまりが良かったようで、「参加者の質」をプログラムの良かった点にあげる方も少なくなかった。一方で、全体としても「情報伝達が遅い」「物事スムーズに動いてほしかった」などの指摘も多く、今後さらに質の良いプログラムを作る上で改善していく必要がある。

あなたのプログラム全体の満足度は？



# 1. 主催団体

## 《組織概要》

IDPC2016を主催する国際開発プランニングコンテスト実行委員会の概要は、右図の通りである。右図のような組織形態を導入しているが、各局とも少人数であるため、必要に応じ局を変えて積極的に業務をシェアしている。

スタッフの学年は、学部一学年から学部二年が主に在籍し、専攻分野も国際協力そのものに限らず、医学、政治学、経済学、文学など多岐にわたる。

活動は都内で週に一度行うミーティングを中心とし、メールで情報交換を補完している。その他には、講師や協賛企業との交渉、プランニングのケース課題作成、参加者募集の宣伝活動などが主な業務となる。

## 《年間の活動》

幣委員会の活動概要は以下のとおりである。4月の発足からコンテスト開催の9月、そして反省会や報告書作成を行った11月まで、約半年に及び活動してきたことになる。活動期間はその内容から、大きく3つに分けられよう。

### 準備期間4~8月

この時期は委員会が発足し、組織の形態作りや、自分たち自身の国際開発の勉強会などが活動の中心であった。コンテストの具体的な中身よりは、その目的や企画の対象とする層などの話に時間を費やした。現地フィールドワークの受け入れ準備のためにUIの学生らと連携して、プログラムの準備も行った。

### プログラム期8~10月

参加者の募集や、講師・審査員との交渉などが本格化し出し、それと並行してコンテストの中身も具体化していった。企業にコンテストの意義が認められ、協賛を得られるようになったのはこの頃からである。8月にいよいよ本番を迎え、スタッフは精神的・体力的な限界を超えながらも、コンテストのタイムテーブルや資料作りに励んだ。

### 活動総括期10~11月

コンテスト後は、報告書（弊冊子）作成、および来年に向けての反省会が主な活動であった。

正式名称	国際開発プランニングコンテスト実行委員会（略称：IDPC）
創立	2008年4月28日
スタッフ数	10人
代表者	水本雄介（慶應義塾大学経済学部）
団体連絡先	URL： <a href="http://idpc-development.org/">http://idpc-development.org/</a>

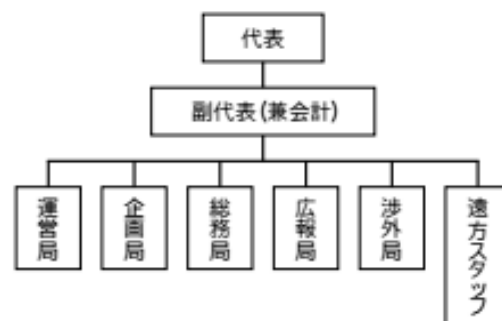


図 国際開発プランニングコンテスト実行委員会 組織図

## 《メンバー紹介》

- 代表 水本雄介(慶應義塾大学)
- 副代表 小松昌憲(慶應義塾大学)
- 渉外局 山田桂子(国際基督教大学)
- 渉外局 猪鼻孝之(慶應義塾大学)
- 広報局 藤井理緒(お茶の水女子大学)
- 広報局 上蘭唯(国際基督教大学)
- 総務局 伊藤航(国際基督教大学)
- 運営局 岡田淳志(東京大学)
- 運営局 金井祐樹(東京大学)
- 企画局 渡辺たらさ(国際基督教大学)
- インドネシア支部
- Dinda.A.Royhan  
(University of Indonesia)
- Nataniel Waraney  
(University of Indonesia)



# 2. 活動詳細

## 《理念・目的の共有》

弊委員会の理念は「国内における国際開発分野を活性化するために、国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献する」ことである。そしてコンテストの目的は、参加者に(1)国際開発分野に必要な様々な能力を養成する場、(2)同じ志をもつ仲間との出会いの場、そして(3)国際開発分野の機関・組織との交流の場を提供することである。この理念と目的は一朝一夕に決まったわけではない。

委員会が発足してから最初の仕事は組織作りであった。そのためにはまず団体の行動指針となる団体理念及びコンテストの目的を明確にし、共有し合う必要があった。2016年4月から始めた話し合いはなかなか合意に至らず、スタッフの自宅合宿などを経て、最終的に団体理念とコンテストの目的が文章化されたのは6月であった。多くの時間を費やしはしたが、理念と目的は、それ以降idpcの絶対的な指針となったため、スタッフが納得のゆくまで話し合った功績は大きかった。

## 《定期ミーティング》

idpcスタッフは結成直後から、ほぼ毎週1回の定期ミーティングを続けてきた。ミーティングは基本的に、以下の内容で行った。

【日時・頻度】毎週金曜日 18:00～22:00

【場所】東京都内

【アジェンダ】各局一週間の活動進捗・今後の予定報告、全体に関わる事項の方針議論、各議題担当者の個別打合せ 前半期には、各スタッフ持ち回りでの開発に関する発表、idpc2016の理念・目標設定に多くの時間を割き、全体での意識の共有を図った。後半期には、主に各局のタスクの報告・確認を行い、コンテスト本番の運営準備を進めてきた。

## 《渉外活動》

コンテストをより質の高い、充実したものにするため、加えて、社会貢献事業をする上で、幅広い学生に参加してもらうため、企業や各種団体の方々に資金・人材・物品面で協力をお願いした。活動当初は渉外の要領が分からず、手当たり次第ご協力をお願いした結果、全く相手にされないことが多々あった。渉外活動を繰り返し、日々検討を重ねていくうちに、相手の「心」を動かそうとしている自分自身が、そもそも何故idpc2009の活動に共感をし「心」を動かされたのかに立ち返るようになった。これが転機となり、各渉外担当が、各々の言葉で活動協力に至るまでのストーリーを交渉に織り交ぜるようになったことで、多くの企業や団体の方々から共感していただけるようになった。このような渉外活動を経て、コンテストに必要な資金・人材・物品、そして多くの方の「想い」を携え、コンテスト本番を迎えることができた。



## 《広報活動》

### ●概評

プログラム全体を通じて、本団体の認知度をあげるため、参加者誘致のために広報活動を行った。団体8年目の中で多くの新しい取り組みを増やした。認知度としては、Facebookのいいね！数(1574)が前年度比較して200以上増えたこと、また団体としてはじめて”プレスリリース”を作成し、「オルタナS」というWEB媒体に掲載して頂いたことを踏まえると、団体認知度は向上したことが伺える。一方、参加者の応募が例年に比べ伸び悩んだ。また最終報告会の一般参加者が芳しくなかったことを踏まえると、広報活動がまだまだ不十分であったと言える。以下は、使用ツールと広報の詳細である。

### 《使用したツール》

チラシ、SNS（ソーシャルメディア）、メーリングアドレス、そしてプレスリリースなど

### ●広報活動履歴

#### ・3月～

Twitterを用いて、運営委員の募集広報を始める。Twitterのフォロワー数は1200人を超えており、運営も2人から始まって最終的に10人集まった。Twitterを用いて、運営委員の募集広報を始める。

#### ・4月～

団体8年目にして、公式HPをリニューアルした。参加者、協賛して下さる企業の方々、一般の方に詳細な団体の情報を伝えられる重要な役割を果たす。メンバー内で意見を募り、常によりよいWEBサイトの運営を目指している。

#### ・5月～

広報担当が決定。2016 8th IDPCのチラシを作成する。ポスターとして大学に掲示を考えたが、学内の承認プロセスなどに手間取ることを懸念して結果行わなかった。より応募者を募るためにも掲示すべきだったのではないかと反省点としてあげたい。より一般の方への認知度を高めるため「プレスリリース」、様々なメディアの記者の方々にイベントなどの開催を報告し、その媒体の趣旨にマッチしていれば記事にいただける。広告との定義の差は難しいが違うものである。

#### ・6月～

Facebookにて参加者の応募を開始する。団体初、Facebookでの広報を行う。費用は4000円で、1万人以上にリーチすることが可能だった。この広報を行ったことで参加してくれた学生がいる。また、Facebookにてキックオフセッションおよび事前合宿のゲストの方々の紹介を始める。国際開発分野において著名なたくさんの方々のご協力頂いていることをPRし、参加者誘致を図った。プレスリリースの作成が遅れ、結果として想定していた数の媒体に宣伝ができなかった。しかし、「オルタナS」という社会貢献活動を集めているWEB媒体に記事を書いていただくことができた。次年度以降は、プレスリリースの作成を早め、また可能ならば二回ほど出すことが望まれる。

#### ・7月～

「OVAL」という国際ビジネスコンテストを主宰する団体との共同での説明会を行う。OVALは日本中国韓国の合同チームを作り、ビジネスプランコンテストを行う団体で、両方にとって応募者集客効果を狙い開催した。

#### ・8月～

キックオフセッションに合わせ、参加者同士と運営が円滑にコミュニケーションをとれるようにグループを作成。随時コンテンツの詳細の情報を流した。参加者が渡航前に不安なことなどを気軽に質問する場としてうまく機能した。

#### ・9月～

最終報告会に一般観覧者を誘致するための広報を開始。主にFacebookを用い、情報を何度かシェアした。

#### ・10月～

現在、次年度以降のプログラム開催に向けてどのように広報活動を行うか戦略を構想中である。



# 3. 決算報告

支出の部		収入の部	
コンテスト開催費		前年度繰越	0
国内イベント		参加費	2,342,000
宿泊費	89,800	協賛金	330,000
食費	61,440		
施設使用料	43,000		
当日備品	20,000	収入合計	2,672,000
運営費(印刷備品、wifi等)	30,634		
国外イベント			
滞在費	1,000,000		
渡航費	1,111,120		
食費	190,000		
運営費	35,487		
当日備品	823		
広報費			
HPサーバー料	12,298		
メールアドレス料	6,000		
Facebook広報費	4,680		
渉外費			
名刺作成費用	3,000		
交通費	5,500		
講師関連費(謝礼費)	13,179		
諸費			
ATM手数料	4,212		
支出合計	2,631,173		
次年度繰越	40,827		



# 4. 協賛・協力

## 《協賛》

東京ガス株式会社様

パシフィックコンサルタンツ株式会社様

株式会社 シェアウィズ様



## 《物品協賛》

株式会社 シェアウィズ様

株式会社 ネイチャープリス様

Nissin Foods Indonesia(日清食品インドネシア)



## 《顧問紹介》



東京大学教養学部・同大学大学院修了。コーネル大学大学院にて博士号(インドネシア史)取得。在インドネシア大使館専門調査員、名古屋大学教授等を経て1997年より慶應大学経済学部教授。2012年から名誉教授。日本占領期の歴史ならびにインドネシア現代社会における開発と社会変容の関連を研究テーマとする。東南アジア研究で1987年コーネル大学から、また2011年東京大学から博士号。1995年から20年以上にわたり、学生をインドネシアへ引率し、開発とそれに伴う社会変容に関する研修プログラムを実施している。1972年のインドネシア留学以来計約20年にわたるインドネシア滞在。インドネシア関連の著書多数。